県内ワイド

情報の

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り

日赤県支部
総務課長
山本裕行さん

支援の手はこれからも

活動終了予定

震災から四カ月。被害は七月十日現在、死者一万五千五百四十七人、行方不明五千三百四十四人、建物被害七十一万四千六百七十八戸。道路損壊・橋梁被害・山崩れ・堤防決壊などは三千九百七カ所にものぼっている。

これほどの大災害だが、避難所は徐々に閉鎖されている。四十五万人を超えた避難所生活者は八万人まで減り、これに伴い最大で百二十余が活動していた医療チームは現在九チームにまで減った。

われわれ日赤県支部救護班も、残念ながら、宮城県石巻市雄勝町での活動を七月末でいったん終了予定との連絡を受けている。

雄勝町は石巻市中心部から車で一時間ほどにある、太平洋に面した漁業と山林の小さな町。住んでいた四千人強のうち半数が津波にのまれ、いまだ行方不明者もいる。

震災前、町内にはかは行方不明。これを受けて当初は四つの医療チームが活動したが、今はわれわれ日赤救護班が交代であたる一チームのみだ。

八月からは、住民は川を渡った隣町の北上町診療所へ通うことになる。しかし、そこに向かうための橋は崩落したまま。これまで車で十五分だったが、迂回経路だと一時間近くかかる。さらに、この診療所の医師は震災後に過労で倒れ、七月から現場復帰したばかり。診察は一日おきで時間も短縮されるなど、まだ態勢が戻ったとは言い難い。

雄勝町を含め、石巻市内には三つの仮設診療所設置が決まった。しかし土地の買い上げなどはこれからで、いつできるかは見通しも立っていない。さらには、そこで誰が診療するのか、医師不足についても深刻な状況が続いている。このような中での医療支援チームかりつけ医が三人いたが、いずれも死亡また撤退には不安の声も大きいのが実情だ。

避難所ではハエや蚊が大量発生し始めている。調理場の女性はハエを手で払いのけながら食事を用意し、われわれもハエたたきで駆除しながら診療活動にあたっている。

熱中症対策も深刻。避難所には人が密集しているため温度は上昇しやすい。しかし体育館内にはエアコンは設置できず、あるのは扇風機だけ。窓や扉は当然、開放するしかないが、そうすると先ほどのハエや蚊が押し寄せる。

医療チームの撤退は被災者の自立を促す意味もあるという。でも地元の医療関係者もまた被災者。復興にどれだけの期間がかかるか見当がつかないと言われている中で、まだたった四カ月ではないか。被災者はもちろん、地元支援者も大いにわれわれに甘えていいのではないか。

地元が自立するのは大切だろう。でもその時期だろうか。しっかり態勢が整うまで、われわれがカバーすべきではないか。

「橋は寸断されても〝こころ〟は寸断させない」。日赤医療本部のミーティングで訴えたら、他の医療チームから拍手が起こった。

義援金を寄せていただいた皆さん。パンを被災地に届けたいと託してくれた福井市内のジャムおじさんたち。被災地で炊き出しを行ってくれた商工会青年部。「お米を持っていってほしい」「飲料水を提供したい」…。誰もが支援の手を緩めようとしない。

皆、同じ気持ちだと思う。そんな中での活動終了予定には、正直やり切れない思いもある。被災地に少しでも笑顔を戻す手伝いを。そのためにできることを、精いっぱいやっていくしかない。

避難所ではハエたたきで駆除しながらの医療活動を強いられる＝宮城県石巻市雄勝町で（日赤県支部提供）